

書 評

Hans-Dieter Evers (ed.). *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective*. Yale University Southeast Asia Studies Cultural Report Series, No. 17, New Haven, 1969. x + 148 pp.

水 野 浩 一*

1 位 置 付 け

タイ国にかんする社会科学研究が活発になったのは戦後のことである。それまではほとんど見るべきものがなく、1930年代に行なわれた農家経済調査の報告や古代行政組織の研究があるにすぎない。¹⁾しかるに、John F. Embree が1950年に“Thailand—A Loosely Structured Social System”を発表するや²⁾、一躍学会の脚光を浴びることになり、欧米、ことに米国の人類学者によるタイ村落の調査研究を刺激し、ひいては、その分析結果が他の社会学者にも影響を及ぼすことになった。³⁾ そういう意味で、Embree はタイ社会の

* 京都大学東南アジア研究センター

- 1) C. C. Zimmerman, *Siam: Rural Economic Survey, 1930~31*. Bangkok, Bangkok Time Press, 1931; J. M. Andrew, *Siam: Second Rural Economic Survey, 1934~1935*. Bangkok, 1935; G. H. Quaritch Wales, *Ancient Siamese Government and Administration*. London, Bernard Quaritch, 1934.
- 2) John F. Embree, “Thailand—A Loosely Structured Social System,” *American Anthropologist*, Vol. 52, 1950.
- 3) 例えば、David A. Wilson, *Politics in Thailand*, Ithaca, Cornell University Press, 1962.

研究史の上で画期的な存在である。

しかし、この著名な論文も、今日では研究史上の古典になりつつある。換言すれば、それほど多くの研究業績が過去20年間に蓄積されてきたともいえる。事実、米国学界の動向からも推察されるごとく、最近では、従来の研究成果を総括するとともに、Embree の論文を批判・検討し、その上に立って将来の研究方向を展望しようとする段階に入りつつある。しかも、この重大な役割を積極的に担うものとして、戦後に研究者として成長した若手の精鋭が登場してきている。1968年3月フィラデルフィアで開催された全米アジア研究者会議の討論会は、まさに、この新しい気運と世代の交替を如実に物語っている。会議では、「はたしてタイは loosely structured social system か」という問い掛けをめぐって、若手研究者の間に活発な議論が展開された。本書はその成果に筆を加え、一冊の書物としてまとめたものである。したがって、執筆者は討論参加者を中心に構成されており、議長役を勤めた Hans-Dieter Evers が編集の労を受け持っている。

2 意図と構成

若手学者の Embree 論文に対する疑惑、批判、挑戦は意外に強烈である。しかし、本書は単なる批判の寄せ集めではない。編集方針としては、むしろ、限界を認め、洗練を必要とするけれども、基本的には Embree を評価する方向をとり、その線にそって、多様な執筆論文が巧みに整理・配列され、全体としての統一を保っている。書名を解釈して基本線を示すと、「比較的視野にたってタイ社会を検討すれば、幾つかの loosely structured social system を分析する理論的枠組が発見されるのではなかろうか」ということになりそうである。もっとも、本書はこの命題を完成された主張として強要するものではなく、判断は読者自身に委ねられている。すなわち、一方では、ありうべき、すべての批判と可能性を叩き出しながら、他方においては、基本的命題を余韻として読者に訴え、再考を促すという手法をとっている。編者の問題意識の深さ、巧みな構成と統一性、執筆者の見解を損わぬ編集法は高く評価されてよい。

書名は、現在ハーバード大学にある Cora DuBois の提案によるものと伝えられるが (p. 2)、このことは全体の構成と無関係ではないようにおもわれる。というのは、書名の提案自体が、本書の意図と狙いを知る上で、きわめて暗示に富んでいるからである。女史は Abram Kardiner や Ralf Linton とともに「基本的パーソナリティ構造」の概念を提唱した人であり、アロール島民について育児様式と人格と文化の相互間における力動的な関係を分析した人類学者として名高い。⁴⁾

編者の Evers 氏は、現在、イェール大学社会学準教授、同東南アジア研究大学院課程

4) Cora A. DuBois, *The People of Alor*, Minneapolis, University of Minneapolis Press, 1944.

の責任者として重要な地位を占め、セイロンの研究者として著名である。⁵⁾ かれは冒頭に Embree 論文を再録した後、まず、J. A. Niels Mulder の痛烈な反対論文と Herbert P. Phillips の擁護論文を対照させることにより、両評価者の分析視角の相違を明確にする。Mulder 氏は、現在、北イリノイ大学の社会学助教授、同東南アジア研究センターの研究参加者であり、タイ、インドネシアに関心を抱く少壮学者である。⁶⁾ かれの見解は社会学者や社会人類学者に予想される意見を代表している。これに対して、Phillips は「文化と人格」を専門領域とする、コーネル大学出身の人類学者であり、いわゆる Embree の忠実な後継者とみなされている。同氏は、現在カリフォルニア大学人類学準教授、同東南アジア研究センターの責任者である。⁷⁾

5) 論文として、例えば “The Formation of a Social Class Structure: Urbanization, Bureaucratization, and Social Mobility in Thailand,” *American Sociological Review*, Vol. 31, 1966; “Kinship and Property Rights in a Buddhist Monastery in Central Ceylon,” *American Anthropologist*, Vol. 69, 1967; “The Buddhist Sangha in Ceylon and Thailand: A Comparative Study of Formal Organizations in Two Non-Industrial Societies,” *Sociologist*, N. S. Vol. 18, No. 1, 1968 などがある。

6) たとえば、 “Sociology and Religion in Thailand: A Critique,” *Journal of the Siam Society*, Vol. 55, 1967; “On the Structural Analysis of Thai Peasant Villages,” *Journal of the Siam Society*, Vol. 55, 1967 などの論文がある。

7) 著書として、*Thai Peasant Personality: The Patterning of Interpersonal Behavior in the Village of Bang Chan*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1965 があり、論文としては、たとえば、 “Social Contact vs. Social Promise in a Siamese Village,” in *Peasant Society: a Reader*, eds. Jack M. Potter, May N. Diaz, and George M. Foster, Boston, Little Brown, 1967 がある。

ついで、第4に、Embree に同情的な立場にたつ A. Thomas Kirsch の論文が配列され、そうすることによって編者は、Embree 論文の背後にある理論的意義を認め、それに照らして前掲2論文を統一的に整理するとともに、Embree 論文の再評価と理論的発展の可能性を説く。Kirsch 氏はハーバード大学出身の精鋭、現在、プリンストン大学の人類学助教授であり、価値体系の研究に造詣が深い。⁸⁾ 第5番目の Steven Piker の論文は、Kirsch の見解を受け止め、タイの村落にかんして新しい理論的枠組を提案している。全体の構成からみると、いわば実質上の締め括りに匹敵する論文ともみうけられる。討論会に参加していないにもかかわらず、特に執筆を依頼された理由も、そこに推察されよう。同氏は、現在、スワトモア単科大学の人類学助教授、とりわけ育児様式・対人間の関係・宗教の連関に研究の中心をおく少壮の学者である。⁹⁾ かれの研究領域が書名の提案者 Du-Bois と類似していることも注目に値する。

以上につづく第7、第8、第9の3論文は、それぞれ独自の見解を示していることは言うまでもないが、全体の構成からみると補足的な役割を演じている。特に執筆を依頼された Boonsanong Punyodyana の論文は、タイ人の見解を代表するものとして興味深いばかりでなく、いわゆる人類学者の限界を鋭く指摘し、タイにおける階層移動の現実を分析して

8) 論文として、たとえば、“Development and Mobility among the Phu Thai of Northeast Thailand,” *Asian Survey*, Vol. 7, 1966; “The Thai Buddhist Quest for Merit,” paper read at meetings of the American Anthropological Association, Washington などがある。

9) たとえば、“The Relationship of Belief Systems to Behavior in Rural Thailand,” *Asian Survey*, Vol. 8, 1968; “Sources of Stability and Instability in Rural Thai Society,” *Journal of Asian Studies*, Vol. 27, 1968 などの論文がある。

いる。同氏は、現在、タマサート大学の社会学講師である。¹⁰⁾ Clark E. Cunningham は loosely structured に類似する概念を整理するとともに、比較研究の観点からそれを批判している。同氏はオックスフォード出身、現在、イリノイ大学の人類学準教授を勤めている。¹¹⁾ 編者 Evers の論文は社会体系のモデル構成との関連において loose と tight を定義し、条件つきで loosely structured の概念の有効性を認めている。

最後に、Michael Moerman が各章を通観して、手際よく問題点を指摘し、全体を軽妙な筆致で仕上げている。同氏はイェール大学出身の精鋭、現在、カリフォルニア大学の人類学準教授の地位にある。¹²⁾ 末尾に付せられた引用文献は豊富であり、著者の数は119人、著書と論文は未出版のもの若干を含めて178件にのぼる。タイに関するものが中心になっているが、人類学者はもちろんのこと、ひろく他の社会学者にとっても利用価値は大きい。

10) 論文として、“Social Mobility and Economic Development,” *Sociological Bulletin*, Vol. 16, 1967 がある。

11) 論文として、たとえば、“Recruitment to Atoni Descent Groups,” *Anthropological Quarterly*, Vol. 4, No. 1, 1967 などがあ、著書として、*The Postwar Migration of the Toba-Bataks to East Sumatra*, New Haven, SEA Studies, Yale University, 1958; *A Study of the Culture of Health and Illness in a Rural and Urban Area of Thai* などがある。

12) 著書として、*Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*, Berkeley, University of California Press, 1968 があり、論文として、“Ban Ping’s Temple: The Center of a ‘Loosely Structured’ Society,” in Manning Nash *et al.*, *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*, Yale University Southeast Asia Studies Cultural Report Series No. 13, New Haven, 1966; “A Minority and Its Government: The Thai-Lue of Northern Thailand,” in *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations*, ed. Peter Kunstadter, Princeton, Princeton University Press, 1967 などがある。

以下、本書の内容を紹介しながら、真の課題を認識するとともに、いかなる解答が見出されるかを探索しよう。

3 概念と内容

“loosely structured” の概念は、Embree がタイ社会の特徴を表現するために使用したことにはじまる。しかし、元来、かれは日本研究者であって、日本人学者の間では、Embree は、むしろ、かれが調査した「須江村」の名とともに記憶されている。¹³⁾かれはハワイ大学で学生時代を過ごし、トロント大学で修士課程を終え、シカゴ大学で博士号を獲得したが、その間、もっとも大きな影響を与えたのは英国の社会人類学の巨匠 Radcliff-Brown であった。1939年に出版された、さきの調査報告も、村落生活のうち社会組織の記述が中心となっており、また分析の焦点は社会構造に向けられている。

東南アジアに対する Embree の学問的関心は、かれが、戦後まもなく文化随員として現地に派遣されてからのことである。特にバンコク滞在は、かれにタイと日本の社会の相違点を強く印象づけたらしい。当時は同国にかんする社会科学的研究は皆無にひとしく、また人類学の理論も未だ十分洗練されていなかった時代であったし、かれ自身も、この方面にかんする調査研究に従事する機会をもたなかった。それにもかかわらず、かれが問題の論文を執筆したのは、そのことによって自己の日本研究に深みを与えることができるのみならず、東南アジア研究の試金石とすることができると考えたからであろう。1950年7月、Embree はイェール大学東南アジア研究所の所長となり、将来の活躍が期待されたが、

13) John F. Embree, *Sue Mura*, Chicago, University of Chicago Press, 1939.

同年12月、不慮の事故のため若くしてこの世を去った。¹⁴⁾

Embree に従えば、インドシナ半島の中央部を占めるタイは、東南アジア全体に共通な文化要素を分有するけれども、他方、歴史的・文化的にきわめて特色ある地域を構成している (pp.3~4)。タイ族は、まず、谷間や平地の水田耕作民であって、この点でインドシナ半島の山地諸民族と異なった生活形態をもつ。さらに、同じ平地民のなかでも、タイの文化はインドからの影響を強く受けており、そのことはヒンズー的文化要素の残留、ビルマ経由の大乗仏教と婆羅門教的慣行の伝播、6世紀来の小乗仏教の繁栄などに認められる。このような伝統をもつタイ文化は、長年にわたり中国と交渉をもち、その支配下にあったベトナムとも異なるし、また、数世紀来イスラム教化したマレーシアやインドネシアの文化とも違っている。

こうした歴史的・文化的差異を念頭においた上で、Embree はタイ社会の特徴を要約し、その概念を定義している (p.4)。その特徴とは、かれにしたがうと、「close に対置されるものとしての loose な社会構造にもとづく文化の相対的統合性の問題にかかわるものであって、ここで loose な統合とは個人的行動の許容範囲が大きいことを意味している。」日本やベトナムをタイと対比すれば、それぞれ tight な文化を造り上げており、その文化は明瞭な形態を示すし、また、いかなる状況においても相互の権利と義務を遵守することを強調する点にかんしてはタイなど比較にならないという。

ついで、Embree は上記の命題に資料的な裏付けを試みているが、“loosely structured”

14) Fred Eggan, “John F. Embree, 1908~1950,” *American Anthropologist*, Vol. 53, No. 3, 1951.

の具体的内容を紹介すると、だいたいつぎの5点にまとめうる。

第1に挙げられるのは「個人主義」である(pp. 4~7)。実際、タイ人の歩行の仕方、軍隊組織のあり方、平等主義的で、家長権の弱い家族における成員の自由な行動にみられるごとく、規則性、規律性、組織性が欠如している。looseな社会構造とは、このような特徴をもつが、それは成員が義務を認めていないことを意味するのではない。義務は認められているけれども、成員はそのことによって過度に拘束されることはないという。そして義務の履行は社会的圧力の結果としてではなく、各人の自由な意志に委ねられている。村落についてみてもそうであって、村はそれ自体、集団としての同一性を保持し、成員は権利と義務を持つけれども、その体系は明瞭に規定されていなければ、また、それほど厳格に強要される性質のものでもない。

第2に(pp. 8~10)、タイのキャバレーを見ても明らかなごとく、集団の管理・運営に関して、成員は個人の好き嫌いや周囲の状況にしたがって役割を簡単に転換するし、責任者もそれに対して寛容である。そういう意味で、きわめて信頼性の弱い行動的特徴がみいだされる。日和見主義、状況主義はタイ外交史の特徴である。これに関連した行動的特徴として、物事に対して無関心・冷淡・無感動な面があり、巧みに他人を欺くことが文化的に賞賛される。従って政党に例がみられるごとく、社会関係や集団は安定性を欠き、人々は結合と離脱の過程を繰り返すことになる。

第3に(pp. 10~11)、かつての身分制も、上下の移動という点からみると、さほど強固でなく、6代目出自喪失=王族離脱の規則、および能力や恩恵による称号授与の手段が存在した。王位継承にかんしては、いちおう規則はあっても絶対的なものではなく、そのため紛争と暗殺がしばしば生起した。また王室

規範は存在したが、その手続きを間違いなく正確に履行する周到な心掛けに欠けていた。

第4に(pp. 11~13)、一般的にいて、教室の様子をみても明らかなごとく、制度の運用にあたって正しく形式に則ることがなく、家屋内を見てもわかるように、念入りに物を整理する態度に欠け、なにごとにつけても粗雑である。また、時間の観念がなく、労働はそれ自体価値あるものと考えておらず、一時的享楽に耽る傾向がみいだされる。

第5に Embree にしたがえば(pp. 13~14)、looseな統合はなにも貧弱な統合を意味するのではなく、それなりに有効な機能をもつのであって、急激な文化変容の状況下でも心理的緊張を人々の間に引き起こさないことが指摘されている。

Embree の論文には、経験豊かな人類学者の鋭い洞察力が認められるが、説明の仕方が印象的で体系性を欠いている。それだけに、一見訴えるところが大きいけれども、同時に問題点も多い。すなわち、第1に、“loosely structured”の概念が曖昧であり、第2に、資料的裏付けが体系的な研究にもとづいておらず、断片的な逸話や印象が中心になっており、第3に、社会構造が関心事であるにもかかわらず、説明はすべて個人の行動の次元で語られている。このような弱点のために、Embree の論文は多くの批判と論争を引き起こすことになった。

4 挑戦と擁護

さて、Embree 亡きあと、1953年にコーネル大学の人類学者 Lauriston Sharp を中心にして、最初の集約的な村落調査が行なわれた。¹⁵⁾ 調査地バンチャン村は、バンコク近郊の変動の激しい地域に位置することもあって、

15) Lauriston Sharp et al., *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Bang Chan, 1948-1949*, Bangkok, Cornell Research Center, 1953.

村落の組織がきわめて弱い、その弱さのために“loosely structured”の概念を発展させる格好の場所を提供したらしい。そして、調査に荷担した人々のなかから、例えば、Herbert Phillips, Jane Hanks, Lucien Hanks¹⁶⁾など、いわゆる Embree の後継者と呼ばれる人々が育った。これに対して、Jacques Amyot, Charles F. Keyes, Niels Mulder, Michael Moerman, Gehan Wijeyewardene¹⁷⁾など批判的な立場をとるが、なかでも Mulder の反論は痛烈である。彼は本書において三つの理由を挙げ、“loosely structured”の概念はタイの社会構造を研究する人々の意気を阻喪するのみであって、社会学的に無意味であるという (pp. 23~24)。

第1に、Mulderにしたがうと、Embree の分析視角は「文化と人格」の研究にみられるものであって、個人の行動は社会制度と文化の一般的性質に反映されるという前提にたつて、行動が分析されているにすぎない (p. 17)。

16) Lucien Hanks には、たとえば、“Merit and Power in the Thai Social Order,” *American Anthropologist*, Vol. 64, 1962; “Two Views of Freedom: Thai and American,” *Felicitation Volumes of Southeast Asian Studies*, Vol. 1, Bangkok, Siam Society, 1965 などがある。

17) Jacques Amyot には、たとえば、*Provisional Paper on Changing Patterns of Social Structure in Thailand, 1851-1965*, UNESCO Research Center, Delhi 7, India, 1965 の著書があり、Charles F. Keyes には、“Ethnic Identity and Loyalty of Villagers in Northeastern Thailand,” *Asian Survey*, Vol. 7, 1966; “Review of Thai Peasant Personality by Herbert P. Phillips,” *American Anthropologist*, Vol. 68, 1966 などの論文があり、Gehan Wijeyewardene の論文としては、“A Note on Irrigation and Agriculture in a North Thai Village,” *Felicitation Volumes of Southeast Asian Studies*, Vol. 2, 1965; “Some Aspects of Rural Life in Thailand,” in *Social and Economic Studies in Development*, ed. T. H. Silock, Canberra, Australian National University Press, 1967 がある。

なるほど、個人の行動を観察して、その許容範囲が大きいことを結論として提示することは正当である。しかし、だからといって、それを“loosely structured”の指標とするならば、それは社会学的誤謬に落ち入るのではなかろうかと反論している。この観点からすれば、たとえタイ人について反復的、規則的、制度的な行動が認められないとしても、そこで筆を止めておくべきで、社会構造とか社会体系などについては沈黙を守るべきであるという結論に達する。

第2に、Mulder は、どのような社会においても、その成員は構造的・機能的に明確に規定された社会的地位と役割の体系のなかで相互作用を行なっているという認識が重要であると主張している (p. 18)。この点に関して、タイ人は例外ではないし、したがってタイ社会は loose であるはずがないという。すべての社会は構造を持つという信念を抱くならば、バンチャン村のごとき無秩序にみえる村落についても、その構造を明確に記述しえたであろう。Embree やその後継者達は、“loose structure”という言葉の口にしたがらも、実際には構造そのものを具体的に記述・分析した試みがない。それにもかかわらず、後継者達は“loosely structured”の概念を唯一の武器として使用し、これさえあればあらゆる資料を分析しようと考えている。それは学問の発展の上で、きわめて不幸な結果をもたらすと Mulder は批判している (p. 17, 23)。

第3に、タイ社会の構造を分析する上で重要なこととして、Mulder は、法的・規範的な面よりも統計的な面に注意し、ascriptive よりも non-ascriptive な様相に注目すべきであることを強調している。このような立場に立って、Mulder は全体社会と村落社会のレベルについて構造分析の可能性を指摘し、タイ社会が loose でないことの反証としている (pp. 18~23)。

以上に対して、Phillips は三つの理由を挙げて“loosely structured”の概念を擁護し、最後にタイ人の村落を研究する場合に留意すべき点を4項目に要約している。¹⁸⁾

第1に、Phillips によると、かれの関心は単にタイ社会の構造原理の究明ではなく、タイ農民の行動を研究することを狙っているという (pp. 26~27)。すなわち、タイ人はどのように振舞い、相手に対してどのように対処し合い、どのように感じ合っているか、そしてそのような状況をタイ人はどのように把握しているかということに関心がある。この立場からすると、現実から抽象された構造モデルは問題ではなく、なにが行動的現実かを見極めることが最も重要になる。たとえば、寺院や僧侶に荷担することはタイ人自身の建前になっているし、調査者もそれが村落秩序の重要な要素を構成すると考えている。しかし、バンチャン村の成人のうち59%は、僧侶になるべしという制度的圧力を自ら進んで無視し、41%のみが今までに得度式の経験を持つにすぎない。この現実は、Phillips にしたがうと、単に病理的現象や規範からの逸脱として片付けられぬ性質のものである。“loosely structured”の概念はこの問題に対して直接解答を与えるわけではないが、「個人的行動の許容範囲が大きい」という現実に、われわれの関心を向けさせる点で有効であると主張している。

第2に、Phillips は、“loosely structured”の概念が行動の一般的傾向に対する叙述的概念にすぎず、blanket term として使用したことのない点を指摘した後、タイ人の行動の領域には“loosely structured”のみならず、“tightly structured”と“moderately struc-

tured”の3種類が識別されるものとしている (pp. 27~31)。すなわち、バンチャンの村人は face to face の状況下においては過度の同調性を示し、相手を気使わねばならぬときは特にそうである (tight)。ところが、その同じ当事者が face to face の状況を離れると、全く異なった行動をする。当事者間の関係を維持していく上で必要な権利、義務、責任にほとんど注意を払わず、それぞれの衝動、気まぐれ、不測の出来事にしたがって行動する (loose)。ところが他方、たとえば、長寿の理由として4種の説明が可能であるが、そのときの質問に対する反応の仕方は“moderately structured”である。というのは、村人はそれぞれ明確な説明を与えるし、その説明は内的論理性をもつという意味で、その反応は“tightly structured”であるが、同時に他方、解答の仕方がまちまちであり、また、どの説明が優先的であるかについて定まっておらず、ときによって違った説明の仕方をするという意味で、その反応は“loosely structured”の領域にも属することになるからである。

第3に、Phillips は、バンチャン村についてタイ的 looseness の内容を提示し、同時にそれが無構造を意味するものでないことを指摘して自己弁護に努めている (pp. 31~36)。かれが明らかにしようとしている点を箇条書きにすれば、第1に、バンチャン村には機能的に意味のある社会組織の数が少なく、したがって第2に、社会生活において dyadic な関係が重要になるが、第3にその社会関係はきわめて流動的で柔軟性に富み、一時的で、脆弱であり、不可測的で、不安定であり、第4にそれは行為者の個人主義的で寛容な態度に関連しているようにおもわれるが、第5に、この態度は宇宙と社会の道徳的秩序を支配する Karma の原理と無関係ではなく、村人はその思想に含まれた「予測不可能性」の枠組

18) 第1に、村落内の共同作業の組織と実態や dyadic な社会関係、第2に、永続的な社会組織の種類と機能、第3に、集団所属意識の程度と順位、第4に、村落レベルでの研究の限界を挙げている。

の中で対人関係における人間の意志を認知していることが挙げられる。Phillips の弁護は認めうるとしても、かれが、たとえば家族や親族を基礎においてバンチャン村の構造モデルを描写していないことは明瞭である。Phillips の関心の中心は、たとえば双系の親族関係などにみられるような dyadic な関係における相互作用の一般的特質に向けられている。

Boonsanong はタイ社会の研究にかんして、制度的・構造的 analysis と現実のレベルでの対人関係の分析する方法があることを指摘しているが (p. 83), この区別は上に記した挑戦者と擁護者の立場に対応している。Boonsanong 自身は制度的・構造的 analysis を狙っており、この観点からタイの全体社会の構造を粗描しているが、記述されたものが tight か loose かという判定を試みる必要はないという態度をとっている (p. 89)。関知しない理由として、Boonsanong は二つの点を挙げているが、たとえ Embree を支持する立場に立つとしても、傾聴に価する忠告である。

第1に、Boonsanong にしたがうと、loose-tight の区別は相対的なものであり、同じ経験的事実が解釈の如何にしたがって、どちらとも判断されるので、観察者の主観が介入しやすい。たとえば、事例4では、西洋人を妻とするタイ人が、4人の青年が運転する車に衝突したときの当事者の行動が記述されている (p. 80)。両者は警察に報告する義務を怠り、その場で直ちに示談を開始した。ところが被害者の青年達は、加害者の示す賠償額に応じず、法外な要求を突き付けて譲ろうとしなかった。ところが、その若者がチュラーロンコーンの学生で、加害者はその大学の卒業生であることが判明すると、状況は一変して、相互に兄弟と呼びあい、その文脈のなかで、賠償額について友好的な解決が成立した。この事例において、当事者は本来なすべき役割に

忠実ではなく、状況の変化にしたがって役割を転換している点で loosely structured の例証とされるかもしれぬが、他方、同窓意識が当事者の現実の役割を強く規定しているという点に注目すれば、タイ人は予想外に tight な面をもつことの証拠にもなる。

第2の批判点は、“loosely structured” の概念が語られる集団的枠組にかかわるものである (pp. 83~84)。Embree はタイ社会の全体的特徴として、この概念を使用しているが、タイのような大規模で複雑な集団について、タイ人の行動を一律に論じることができるだろうか。Boonsanong は疑惑の念を抱いている。タイ社会は、その内部に様々な社会的部類や機能集団を含んでいる。しかるに、Embree の支持者達の資料はごく限られた村落の対人間関係の微視的な調査にもとづくにすぎない。特定の小さな村落にのみ目を奪われ、全体社会の文脈での巨視的な研究を怠る人類学者には、タイ社会全体の構造について語る資格はないと Boonsanong は批判している。Phillips も、本書では、この批判を自ら認め、「クワキウトル族がディオニソス的でないのと同じ程度において、全体としてのタイ社会を loosely structured と規定することはできぬ」と自己の立場を釈明している (p. 38)。

最後に、Boonsanong は社会的部類としての階級が現に存在することを指摘し、とくに官僚と農民に関して、前者の優越的・権威主義的な役割と後者の受動的・服従的な役割が明瞭に識別されることを記述し、それが社会的調和の観念によって安定性を与えられてきたことを指摘している。しかも、“loosely structured” の指標の一つとされている上下の移動についても、さほど顕著でないという。たとえば、現職業と親の職業にかんする統計を時代別に比較すると、階級間の移動は以前よりも今日のほうが困難になっている (p. 99)。

これは Evers が指摘しているように現実と認識のレベルの食い違いとして把握されうるが (p. 124~125), loose とされたタイ社会にも階級ないし階層構造が明瞭に識別されるとする Boonsanong の主張は至極当然のことである。

5 課題と解決

Boonsanong がタイの全体社会について試みた制度的・構造的分析の方向は村落社会についても可能である。筆者はかつて東北タイの村落について、農地を所有しない耕作者が多数存在し、妻の両親と共同耕作の関係を維持していることに注目し、この点から村落の全体的構造を分析したことがある。¹⁹⁾ その中心的な課題は共同耕作、婚姻形態居住制、扶養義務、相続形態などの慣習、妻-母方的要素の濃厚な双系制下の家族と親族集団、年齢秩序、無定形な階層構造などを家族の周期的発展段階上の諸類型と非永続的な屋敷地共住集団 (multihousehold compound) の形成・発展・消滅の過程と関連させながら村落の構造を全体的に把握しようとしたものである。

Embree も、その後継者も、タイ村落の構造をこのようなかたちで記述してみせたことはない。その意味で、Mulder の批判と可能性は、しごくもつともである。しかし、構造を記述しえたとしても、かれのごとく、それを “loosely structured” の反証として挙げることはできないように思われる。というのは、Embree 流に言えば、“loosely structured” は

19) 拙稿、「農地所有と家族の諸形態—タイ東北部の稲作農村」『東南アジア研究』3巻2号、京都、東南アジア研究センター、1965；「階層構造の分析—タイ国東北部の稲作農村—」『東南アジア研究』6巻2号、1968；「東北タイの村落組織」『東南アジア研究』6巻4号、岩村忍教授退官記念号、1969；“Multihousehold Compounds in Northeast Thailand,” *Asian Survey*, Vol. VIII, 1968.

なにも無構造を意味していないし (p.13), 反対に、構造が認められても tight だということにはならないからである。この点、Mulder の挑戦は “loosely structured” 論に対して不公平ではないかと筆者は考える。

Evers は、どちらかというところ、制度的・構造的的分析に関心を抱いているが、loose と tight にかんして重要な概念的区別を試みている (pp.115~119)。すなわち、Evers は構造モデルには認識的、規範的、および統計的モデルの3種類があることを指摘し、それぞれについて looseness の概念を明快に定義している。すなわち、第1に認識的次元について、社会的行為に関する規定が数において少なく、内容が不確定であり、代替性が高い場合、第2は規範的次元にかんして、社会的行為にかんする規定、もしくは住民自身による構造モデルが拘束的でなく、必ずしも履行されねばならぬものでない場合、第3に統計的次元にかんして、同一の社会的状況において同一類型の行動が生起する頻度が少ない場合、それぞれの次元の構造モデルは loose だという。しかも、社会的移動の分析が示すごとく (pp. 121~126), ある次元において loose であっても、他の次元では tight でありうるから、その意味で三つの構造モデルの間には必ずしも一貫性が認められるわけではないことを Evers は指摘している。

この概念的区別は、Mulder の指摘とともに、きわめて有意義であるように見える。たとえば、loose だとされたバンチャン村における家族の形態を統計的に観察すると、東南アジアの他の国々の村落に比べて拡大家族の割合が多いという予想外の事実が明らかになる (pp. 120~122)。事実、Evers の概念的区別の重要性は、筆者自身も東北タイの村落を調査し、その構造を分析するに際して痛感していたところである。しかし、ひとたび村落の全体的構造が描写されれば、それについ

て loose か tight かを判定することは、どれほどの意義があるのかと疑問を抱かざるをえない。なるほど構造的要素の各々について、各次元ごとに、定められた基準にもとづいて looseness の度合を判定することができたとしても、逐一判断を下した後に、「タイ国の若干の村落においては、比較的多数の人々が共に生活し、共に作業し、共通の財を管理し、そして個人主義と独立性にもかかわらず二つ以上の家族が住居を共にする」と結論することによって、tight な面を指摘するにとどまるならば、それは労力に比してあまり生産的であるとは思われない。

以上、要約すると、Embree は日本との対比においてタイ社会の全体的特徴として“loosely structured”の概念を提唱したが、Mulder や Boonsanong などの制度的・構造的分析によるとタイ社会も明瞭な構造をもつことが明らかにされ、それを Evers の構造モデルの3類型に照らして判定すれば、タイ社会には loose な面と tight な面が存在することが明らかになった。他方、対人間関係の分析を試みる Phillips は、タイ人の行動に loose, tight, moderate の3領域があることを指摘しながらも、バンチャン村の社会はきわめて loose だと主張する。その根拠は社会組織の数の僅少性、不安定な対人関係、他人の意志の不確定性にもとめられる。

Evers も Phillips も loose について明確な定義を試みているので、それにもとづいて任意の社会に判定を下すことは、非常に簡単な事柄のように思われる。しかし、Cunningham の論文は、比較作業が予想外に困難であることを物語っている。かれは、バリ島とジャバの村落の資料をタイや日本の村落と比較することによって、一見明確に定義された looseness の概念が、実はきわめて曖昧なものにすぎないことを示している (pp. 109~111)。

バリ島やジャバは小乗仏教の栄えた大陸部

諸国と同じように、中国よりは、インドの影響を強くうけた地域である。そして Phillips にしたがうと、バリ島もジャバもタイと同じように対人間の関係は非常に loose である。またタイ人の性格が冷淡・無関心であるごとく、Mead にしたがうと、バリ島民も孤立的性格が強く、親密で情緒的な関係がみられない。しかし社会組織についてみると、タイではその数が少ないが、バリ島の村落には独特な組織があり、Geertz によると、seka と称される任意集団に対する忠誠が強く、それは文化的に価値あるものとされている。このように検討してみると、loose の決め手として、どの文化的事実を選び出せばよいのか混乱を引き起こすと Cunningham は主張している (p. 109)。

ジャバの村落はさらに複雑な問題を提供しているとかれはいう (pp. 110~111)。人格にかんしては、Geertz の研究からうかがえるごとく、タイとならんで loose であるし、任意集団の存在という点についてみるとジャバはタイとバリ島の間位置づけられるであろう。ところが Geertz にしたがうと、ジャバの家族・親族組織の特徴は遠心分離的であるといわれるが、これは loose と類似した概念とみなしうる。そうすると、この点にかんしては、ジャバはタイとならんで日本と対比されることになる。しかし、他方、Wolf にしたがうと、ジャバの村落は土地に基礎をおく共同体的性格が濃厚であるから、この点のみを取り上げるならば、ジャバは日本とならんでタイと対比されることになる。

以上 Cunningham が示したように、loose-tight の文脈で、全体としての村落を比較しようとする、焦点が見失われ、比較の基準が曖昧にならざるをえなくなる。他方、Evers にしたがって、すべての構造要素について loose-tight を判定しえたとしても、比較はやはり困難である。というのは、この場

合、比較しようとする各村落社会について loose と tight の割合を測定しなければならぬからである。

それでは、“loosely structured”の概念は意義のないものとして葬ってしまわれるべきであろうか。筆者には、Embreeの論文はそれほど意味のないものとは思えない。Kirschにしたがうと、Embreeの論文をめぐって分極化した見解が対立しているが、問題は少しも解決されていないという(pp.49~52)。論争の根源はEmbreeの“loosely structured social system”の概念が予想外に曖昧であり、体系的説明を欠き、問題の認識が不明瞭である点にある。それにもかかわらず、各論者は、Embreeの提供した問題提起が比較的明瞭であるという前提にもとづいて、それぞれの立場から“loosely structured”の概念規定を任意に解釈し、それを支持したり、反駁するための資料を提出しているにすぎないという。KirschはEmbree論文の曖昧な点を掘り下げ、以下のごとく、問題提起の本質を問うている。

第1に、Kirschは、Embree論文全体を通じて、社会・文化・人格の3次元が明瞭に区別されておらず、しかも構造という用語がなにを指すのか曖昧であることを指摘している(p.43, p.45, p.48)。研究歴からすれば、Embreeは「文化と人格」の領域よりも、まず社会構造に最も大きな関心を抱いていた人であり、論文作成当時といえども、変わっていなかったであろう。ところがEmbreeが提示した例証は、すべて文化的・心理的な用語で説明されており、地位・役割の体系にかんする記述はみいだされない。とすれば、当然なにを描こうとしたのかが問われねばならない。Embree自身この点を十分認識していなかったように思われるが、それは制度的行動の構造ではなかったらうかとKirschは信じている(p.43, p.56)。²⁰⁾

このような見地にたって、Embreeの提供した例証を眺めると、日本とタイのそれぞれについて一貫した行動の型が浮かび上がってくるという(pp.49~50)。日本の場合、役割行動にかんする期待、および自己が直面する役割と集団的状况に対する行為者の同調性にかんして一貫した型が認められる。そして、そこでは、役割期待は行為者の行動となって現われる。たとえば、日本人は、家族、親族集団、近隣集団、村落、国家のごとき社会構造に位置づけられたとき、これらの特定の役割と集団的状况に自己の関心を従属させ、一体化させることが期待されるのみならず、現実にもその期待に同調する。しかも義務と忠誠、労働と規律、その他集団的統一性にかんする文化的主題がひろく浸透している。そして、これらの要素は、内的・外的な制裁をともなうことによって、期待に対する同調的行動を鼓舞し、非同調的行動を抑える。Embreeが言わんとする事柄を明確に表現しなおすと、日本の場合のようにtightな社会においては、社会構造と文化の体系と心理学的体系の間に同質異性の現象がみられるとKirschは記している(p.49)。

タイについても、一貫した期待の型と集団への負担の型があるし、明記されてはいないが、役割期待の体系が存在するであろう。しかし、Embreeが強調したのは、「個々の行為者が、現に直面している特定の役割や集団的状况に自己を一体化させず、緊密に結び付けず、それに反して、各人は家族、親族集団、近隣集団、村落などの社会構造に位置づけられるとき、これらが課す役割や集団的状况に自己の関心を従属せしめることを期待されて

20) KirschはEmbreeの例証のもう一つの性格として、比較的枠組のなかで“loosely structured”の概念が使用されていることを記し、そしてこの概念が質的な特徴として把握されているのか、それとも量的な問題であるのかにかんして、Embreeは曖昧であることを指摘している。

はいない」点にある。そして、Embree の論文は、これらの期待と集団への負担（あるいは欠如）の型がタイ人の行動の一般的傾向や性格特性などと呼応していることを示しているように見える。Embree がタイ社会について、「個人主義」とか「個人の行動の許容範囲」とかいったことを記述しているのは、まさに上記のような文脈においてであり、同調性や一体化など社会と個人の結び付きに関連するものであって、Embree はこの観点から loose な社会構造と tight な社会構造の2類型を設定したのであると述べて、Kirsch は Embree 論文の焦点を明確に描き出している (p.50)。

Kirsch が推論するところによると、Embree は、おそらく、タイ社会が異常な様相を提示していると感じたに違いない。しかし、Embree 自身はこの問題を十分認識していなかったように見える。ところが、その異常性の本質は、それが常套の社会理論によっては説明しえないという点に求められるものであり、したがって問題は記述の次元ではなく理論的な次元に属することを Kirsch は指摘している (pp.55~57)。すなわち、第1に、日本の場合においても、すべての成員が集団的状况に同調するとはかぎらないが、社会的統制が強く働くため、非同調的行動は規範からの逸脱として把握されうるが、これに対してタイの場合においては、社会的制裁が発現しないことが多いので、単に逸脱行動として片付けてしまうわけにはいかない。第2に、社会統制が全く適用されない領域についてみると、日本の場合、非同調的な行動は個人に特有な性癖として処理されうるが、タイの場合においては、非同調的行動はいわば制度的行動となっており、社会的・文化的に承認されているものであるから、単純に個人特有の性癖として研究範囲から締め出してしまうわけにはいかない。第3に、日本の場合のように常套の社会理論が通用するところでは、社

会的連帯性や集団的統一性の概念が適用されるが、タイのように個人が社会構造に対して相対的独立性を保っているようなところでは、このような概念はうまく当てはまらない。

このようにタイ社会の異常性は常套の社会理論によって説明できぬという点にあるとすれば、Embree はそれ変わるべき新しい理論的枠組をタイについて探求すべきであった。しかし、Embree はこの問題を十分認識しなかったために、新しい理論を提示することができず、ただ印象的な説明を与えるにとどまってしまったし、また「文化の相対的統合性」という曖昧な概念によって問題をぼかしてしまった。Kirsch は Embree をこのように批判しながら、Embree 自身十分に気付かなかった問題の所在を明確にしている (pp.57~58)。最後に Kirsch は、Embree が「文化の相対的統合性」という概念によって問題の解決にある種の方向を与えていることを評価し、「行為者としての人間が社会のなかで、どの程度、明瞭に分節化されているか」を探究する必要がある、また、文化が社会や個人をどのように型どっているかという点を明らかにする必要があると主張している (p.59)。

Piker は、上記の理論的枠組の必要性に答えるべく、タイの村落社会に接近し、興味深い見解を提示している。かれは Embree 論文の本質と課題を十分認識した上で、loose と tight にまつわる不必要な混乱を避けるために、新しい概念、すなわち collectivity-bound structure と not collectivity-bound structure の2類型を提唱している (p.67)。ここで構造という用語は、なによりも社会構造に関連していることは明らかであるが、個人との関係において社会構造を取り扱う関係上、役割概念によって表現しなおされているから、実際上は制度的行動の構造と解したほうが理解しやすい。その場合、役割期待の強弱、集団的状况に対する同調性の強弱が焦点におか

れ、これを社会・文化・人格の文脈において総合的に把握しようとしているように思われる。タイについて Piker が考えている理論的枠組を単純化して解釈すれば次のごとくである。

not collectivity-bound structure の中核一たとえば個人主義、非同調性、許容性—を取り巻く社会的特性をみると、第1に、社会組織の僅少性、第2に、社会集団の任意的性格、第3に、社会的結合の不安定性が挙げられている (pp. 62~66)。第1と第3については、すでに Phillips の論文にかんして触れたので、第2の任意性について説明すると、それは、出自やその他の明瞭で公式的な加入条件が欠如し、脱退を禁止する公式的な規定が欠如し、脱退はそのときどきの、加入者の自由な選択意志にもとづくという気持が存在することを意味している。したがって、たとえば僧侶の身分についてみると、若者達が得度式について家族の圧力を受けることは確かであるけれども、安居期が済めば、その後の身の処し方は全く当人の自由意志にもとづいている。家族にかんしては、僧侶団や親族ほど顕著ではないにもかかわらず、村人は家族的結合を任意参加として眺めている側面が認められると Piker は述べている。

文化的特性としては三つの点が指摘されているようにおもわれる (pp. 68~71)。第1に、社会組織の形態と継続性を損うことなしに個人的性癖を表現せしめうる範囲を定める体系が存在するはずであるが、これは個人の道徳的属性にかんする観念、すなわち限界を越えて他人を傷つけることはできぬとする態度、さらに、最も悪い犯罪人でさえ、生活の様態を変えれば尊敬の対象ともなりうるとする寛容性の観念などと結びついている。第2に、社会的凝集性についての観念が問題になるが、村人は他人の意志は窮極的には不確定であって、相手に対しては具体的で詳細な期待をできうるかぎり抱かぬようにしている。このよ

うな人間の本性と資質にかんする考え方は仏教的思想や呪術的信仰に表現されている。第3に、Piker はタイ社会の開放性に触れているが、重要な点は、仏教思想に表現される宇宙と社会の秩序にかんする観念の究明であって、たとえば、Hanks が著わした 著名な論文を想起すればよい。²¹⁾

第3に、人格の領域にかんして、Piker は独立性と依存性の二律背反的態度、および動機の多様性を試論として挙げている (pp. 71~74)。この指摘は、通常、文化の普遍的様相は担い手の大部分に斉一的な人格の型を与えるとされているが、タイの場合、この理論は通用しないという考え方を反映している。というのは、タイ人の相互作用を観察すれば、社会体系内の行為者は、たとえば、上位者に対する忠誠と自己追求、自明の原理としての独立性と危機に際しての有力者への依存、あるいは宗教的禁欲と世俗的目的的追求および快楽主義といった相反する社会的態度が併存していることがわかるからである。しかも、これらの多様な社会的態度は、タイ村落社会においては、いずれも顕著にみいだされるのみならず、多くの個人は生涯を通じて様々な態度の間を遍歴する。したがって、タイ的人格特性として、つぎの2点、すなわち、個人の人格特性は内容的に、必ずしも一貫していないこと、および個人個人が多様な心理学的特性を同時に表現するということが仮説として考えられる。したがって、Piker は、そのような多様な人格特性が制度のなかにどのように反映し、また諸個人がそのような制度に対してどのように接近するかという問題が追求されねばならないと主張している。

以上のごとき理論的枠組は、中部タイの村落から導き出されたものであって、他の地方の村落や全体としてのタイ社会にかんして適

21) 前掲 “Merit and Power in the Thai Social Order”

切であるかどうかは経験上の問題であることを Piker は断っている (p.75)。しかしながら、Embree 論文の本質と課題の理解の上になら、個人と社会の結び付きを、ひろく社会・文化・人格の文脈において総合的に把握しようとする立場から、バンチャン村の経験的資料にもとづいて具体的な理論的枠組を提示している点、Piker の論文はきわめて注目に価する。そして、Embree がタイ社会について異常と感じたところのものも、こうした理論的枠組に照らして考えるならば、さほど奇異にはみえないであろうと思われる。

6 全体的評価

以上を通じて、本書全体を評価し、あわせて筆者の立場をも明らかにすれば、つぎのごとくである。第1に、本書は、Embree 亡きあと20年間にわたる米国のタイ社会の研究業績が、かれの論文との関連において問題にされ、その発展と現況が総括されている点で画期的な作品である。第2に、Embree の“loosely structured social system”の概念に対して基本的には賛否・同情・修正の態度があり、それぞれの立場から loose と tight の概念が明確にされているが、多様な見解が提示されていて、きわめて興味深い。しかも、それが単なる抽象論に終わらず、必ず具体的な分析事例が含まれていて、どの論文も説得力に満ちた内容を示している。第3に、タイ社会の研究には、大きく分けて二つの方向が存在することが明らかにされている。その一つは地位・役割体系としての社会構造の分析であって、構造モデルを組み立てることを目標としているのに対し、他の一つは、現実の行動に注目し、対人間関係や文化と人格にも関心を抱く分析法である。第4に、本書は、従来閑却視されていた第1の方法を発展させるならば、今まで気付かれなかったタイ社会の様相が明らかにされる可能性のあることを明確にしている点、きわめて有意義であ

り、新分野の研究を鼓舞するものである。ただし、筆者は、その分析結果を loose-tight の文脈で論じることが不適切であり、非生産的であるように思う。それにもかかわらず筆者の分析した東北タイの村落は日本の村落と比較すると loose だという印象を免れない。その印象は社会と個人の結び付きの度合いにかかわるものである。Embree 論文の着眼点もここにある。第5に、本書は、Embree の“loosely structured social system”の概念の焦点をそこにみだし、いかなる意味で、それが問題にされねばならなかったかを問うことによって Embree を再評価している点で有意義である。第6に、その再評価を踏まえた上で、本書は「社会・文化・個人」に関する新しい理論が必要であることを指摘し、この観点から今までのタイ社会の研究業績を回顧すれば、いかなる理論的可能性が存在するかを問い掛けており、タイ社会研究の第2の分析法を方向づけるものとして高く評価される。その方向として、本書は、同調性と非同調性に焦点をおき、タイ人の制度的行動の構造をひろく社会・文化・人格の文脈のなかで把握しうることを明確にしている。そして第7に、loose-tight という用語の表面上の意義にとらわれず、Embree の真意をくむ立場から、collectivity-bound structure と not collectivity-bound structure の概念が提唱されており、この観点から諸社会の比較が可能であるとしているが、出発点としてタイは適切な研究の場になることを説いている。ここに本書の真の価値があり、故 Embree に捧げられてしかるべき内容をもっている。もちろん、そうはいっても、社会構造モデルの発見が疎んじられてよいはずはなく、ことにタイのような社会においては、社会構造を明瞭に描き出すことは容易でないだけに、いっそう注目すべきことでもある。さきに記したごとく、本書はこの方向の重要性をも十分に指摘している。